

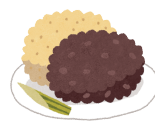
薬師寺通報

令和七年
秋彼岸第四十四号

発行所
京北細野町上ノ町三十三
岸池山 薬師寺

秋彼岸によせて

堀 士 大 虚



この夏、京都市では気温三十度を超える真夏日が年間百日を超えました。百年前の平均真夏日数が六十日ですから、今や京都も沖縄や南西諸島並です。幾分朝晩は涼しくなったとはいえ、御自愛專一にお過ごしください。檀信徒の皆様におかれましては益々御清祥のこととお慶び申し上げます。

今春、境内で転倒した際に左肩を骨折しました。役員様や檀家様には入院、退院後も寺の護持にご尽力頂き有り難く厚く御礼申し上げます。地域社会では何かが壊れてしまった時に近隣の人が直したり、友人が引越す時に手助けしたり、子どもの友だちが家に遊びに来た時に親が食事を勧めるなど資本主義の論理とは違った「助け合い」をします。資本主義は、それらをすべて「サービス」という対価に変えます。

その結果、私たちは無力な消費者となり、お金がないと何もできない存在になってしまします。仏教の「無財の七施」の中の「身施」は、自分の体を使ってできる奉仕を意味します。金銭や物を与えるのではなく、自分の行動や労力を差し出すことです。ゴミ拾い・介助・ボランティア・地域活動に参加すること等、「身施」は人を助けながら自分と社会全体を豊にする実践です。現代の日本のように孤独や分断が問題になっている社会での効果は非常に大きいのではないのでしょうか。孤立や貧困などで既存の制度やサービスにアクセスできない人たちへも「身施」が大きな力を持ちます。日常の助け合いや「あなたは一人じゃない」と伝えること自体が大きな救いです。他者に対するお心遣いを巡らせ、心地よいお彼岸をお過ごしください。皆様のご健勝を祈願いたします。

作麼生説破

そもさんⅡどうなのだ？
せつばⅡ説明いたします

「僧侶の戦争加担」って？

今年を終戦後八十年。先の戦争では戦場に赴いた僧侶もおられ、慰問や戦意高揚の布教活動に従事しました。当時の国家神道体制下では宗教も「国策に従うこと」が強制される状況で、仏教界も「生き残るための順応」として国家に従った面があります。日清・日露戦争期、仏教各宗派は「国体」を支える立場を強調し、国家への忠誠を説く僧侶が多くなりました。日露戦争時には出征兵士を激励し、「戦死すれば英霊となる」と説いた事例もあります。太平洋戦争期（1931年満州事变以降）臨済宗や曹洞宗を含む多くの宗派が戦争協力声明を発表。僧侶が国家体制への協力として、ほぼ全宗派が国家政策に同調し「大東亜戦争は聖戦」と布教で強調しました。出征兵士を「菩薩の行」とたえ、戦死を「名誉の往生」と説いた例もあります。実際の行動としては、慰問僧（従軍布教師）として戦地へ赴き、兵士の士気を高める活動をしたり、寺院で「戦勝祈願法要」や「出征壮行会」を開催。一部僧侶は戦死者を「護国の英霊」と讃え、檀家に布教もしました。代表的な宗派の戦争協力として、浄土真宗は本願寺派・大谷派ともに国家への協力姿勢を鮮明化。日蓮系宗派は「皇国守護」「国家護持」の論理で積極的に戦意高揚に関与。臨済宗・曹洞宗は1943年「大東亜戦争完遂祈願声明」を発表。禅思想を「武士道」と結びつけ、戦争正当化に利用しました。戦後は多くの宗派が公式に「戦争協力の過ち」を謝罪する声明を出しましたが、一方で、個々の僧侶の戦時協力の実態はまだ十分に語り尽くされていない部分があります。個人レベルで戦意高揚に協力しつつも内心は「殺生戒」に悩

んだ僧侶や、辺境の寺や農村では、檀家の出征・戦死に心を痛めつつ祈念を続けた住職も多かったのです。

臨済宗の僧侶の中にも戦前・戦中に武士道と禅を結びつけ、「生きて帰ると思うな。生きて帰ることを考えるから卑怯になる」「禅は武士道の母胎である。兵士よ、無心に死ね」「大東亜戦争は仏法の大道である」といった出征兵士への檄文は、軍国主義の思想的支柱となり国家の戦意高揚に利用されました。

反省した僧侶の多くは、戦後に社会的に弱い立場に置かれた人々（被爆者、ハンセン病患者、貧困層）と共に歩みました。それは二度と同じ過ちを繰り返さないという誓願でもありました。日本の僧侶たちが「戦争に協力し、その後どう生き直そうとしたか」を知ることが極めて重要な事例です。

仏教では戦争の根源を「欲望・怒り・無知」に置きます。今現在の世界各地で続く戦争は、一握りの有力者が自分の手柄とメンツのために起こした戦争です。お釈迦様は争いの根本原因は「権力欲・報復心・偏見」であり、暴力ではなく智慧と慈悲が争いの解決に不可欠だと仰いました。また、自分の国も他国も一体化して相互依存の関係にあるという「縁起」の思想は、敵を作る思考を解きほぐす役割を持ちます。

歴史的に多くの宗派が聖戦を肯定した苦い経験を持ちますが、仏の教えを広げ、世界中の人々に過去の恨みを捨て去って戦争は決して起こしてはいけないと言いつけるのが僧侶の努めです。聖職者は過去を直視し、懺悔する勇氣を持ち、不正義の前には沈黙せず、常に苦しむ人々の側に寄り添ってほしいものです。

この世界は、闘いと、言い争いと、心配事と、悲しみと、物惜しみと、「わたしがいるぞ」という慢心と、誹謗中傷に取り憑かれている。

やがて必ず喪失にたどり着きさまを見て、私は空しくなった。

——『スッタニパータ』『闘い』と『武器』の節

令和七年度秋季彼岸会法要

九月二十三日（火）午前十一時より

十時半より受付いたします